

前回、資源とは「働きかけると力を発揮する可能性の束」であると定義しておきました。この定義には三つの重要な側面が含まれています。一つには、あるものが資源に「なる」のは資源それ自体の性質より、働きかける側の視点や能力に依存しているということ。次に、資源というのは可能性の「束」ですから、いろいろな可能性を秘めていて、しかも互いに「つながっている」という側面です。宮城県の牡蠣・ホタテ業者の間で始まった「漁民が山に木を植える活動」などは、つながりの回復に向けて人々が動き出した例として注目すべきものです。最後に、資源は特定の集団の地位や影響力を高める手段になりますから、資源の支配をめぐる争いが起きやすいということ。イラクの石油を引き合いに出すまでもなく、天然資源の支配権をめぐる争いは多くの戦争の発端になってきました。要するに、資源とはきわめて社会的な概念なのです。こうした特性をもつ資源の概念は別々の対象として考えられがちな存在を一体のものとして考えるよう私たちに促します。今日、私た

他方で今日の大学では「オリジナリティ」が強調されすぎていく気がしてなりません。論文審査のときも「あなたのオリジナリティは何ですか」とよく質問がでます。独自の貢献が期待される学問の世界で、この問いかけは確かに重要です。ただし、こうした質問に長くさらされると、人との差異を見る習慣だけが発達し、互いの共通点を発見しようとする態度は低下します。現実社会の問題、とりわけ環境やサステイナビリティといった公的な問題は、共通項を探し出して異なる考え方もつ人々の共感を呼び、総合に向かわせることが極めて重要です。そして、共通項を見つける対象を現代に限定せず、過去の歴史や将来へと拡げることでの知的想像性は更に豊かなものとなるでしょう。この連載では、とりわけ「歴史」を強調してきました。そこで戦後日本の資源政策を例にして「総合」のあり方を考えてみたいと思います。

共通項の発見

佐藤 仁

東京大学大学院准教授
(国際協力学)

ちが直面している地球環境問題や貧困の問題が様々な断片化（中でも重要なものは、市場原理に適合的な領域に多くの資源を集めてしまい、それ以外の領域を置き去りにする傾向）によって強化されているとすれば、バランスを取り戻すという意味で資源の概念は使えるかもしれません。

大学を中心に学問を担ってきた人々は「断片化」に手を貸してきた責任の一部を負うべき立場にあります。ところが歴史的に見ると、学問とは既存の枠の中での洗練よりも分野を超えた共通項の発見があったときに最も輝かしい進歩をとげたと言えそうなのです。B・コーエンの『Interactions』という本の中には、歴史上、自然科学と社会科学の間で取り交わされたアイデアの意外な相互作用の事例が多く描かれています。例えば、T・マルサスの人口論やA・スミスの分業論はダーウィンの進化論形成に大きな影響を与えました。一見、無関係に見える現象同士の間に関係や形状の共通性を見出すことが偉大なる発見につながる一つのパターンだったので。

戦後の資源論に学ぶもの

本連載の二回目で見たように、戦前の資源論は「お国のため」の動員論でした。それが敗戦を境に、一夜にして国民のための民主主義的な資源利用への変更を迫られたのです。これほど急激な資源政策の転換を迫られた国はほかにないでしょう。この大切な任務を遂行するために、資源問題を総合的、科学的に扱う機関として一九四七（昭和二十二年）に資源委員会（後の資源調査会）が設置されました。資源委員会は、自国の資源の科学的・合理的利用を実現するための組織で工学や社会科学、政策の実務担当者など多様な人材の参加を仰いで、土地、水、エネルギー、地下資源について、実態の正確な把握、調査方法の統一と合理化などを通じて生産力の拡大を目指しました。そこに生産力の下降しつつある資源（侵食された畑地、埋没した貯水池、老朽化した水田、汚濁した水質）の適切な管理を通じた「生産力の保全」という観点が加えられたのは生産と保全をつなげて見る視点があつたこ

●連載講座●

サステイナビリティと資源の分配 4(最終回)

とを示すもので注目すべきことです。

資源の総合的利用を目的とした資源調査会における「総合」のイメージを形づくる上で大きな役割を果たしたのが米国の「テネシー河流域総合開発計画(TVA)」でした。ここでは地域開発を従来のセクター割りで考えるのではなく、流域単位での「資源の一体性」を強調して、開発のあらゆる段階で草の根の人々を参加・動員することに重点が置かれたのです。熊野川や琵琶湖水系ではTVAをモデルとした総合開発が企画されました。戦後初期の資源調査会の系譜を見てくると、そこには「現場」を求心力に諸学を総合させる動きがありました。

その後、経済的に豊かになった日本では、天然資源は外国から買えば済むものになりました。そして、富裕化とともに環境問題が顕在化しました。環境問題の告発は、主に被害住民や開発に反対する立場の人々によって行われるようになり、資源の開発と環境保全の論者は互いに分離していきます。しかし、人間が生活を豊かにするうえで資源を見出し、



1949(昭和24)年に日本橋三越で天皇皇后両陛下をお招きして、GHQと資源調査会の協力で開催された展示会「日本の国土開発と資源の最大利用——将来の日本」の様子(出典:資源協会編「日本の復興と天然資源政策」(1985))。

取り出して分配するという開発の側面と、その過程で生み出される負荷(廃棄物、二酸化炭素など)を管理するという環境の側面とは表裏一体をなしています。両者を分けて分析の精緻化を進めてしまう前に、一つの構造としてつながりを見出す態度を戦後の資源調査会の経験から思い出すべきではないでしょうか。

学びほぐすこと

サステイナブルな社会の実現に向けて私たち一人一人が学ばなくてはいけないことは多くあります。しかし、重要なのは「知識の追加」ではなく、これまで当たり前と思っていた前提を一度忘れてみることで、そして、もう分かっている「常識」をうまく働かせることです。もちろん既存の学問の蓄積や経済を取り巻く諸制度を全否定しても意味がありません。しかし、今日の諸問題を生み出してきたものがまさにそうした諸制度であるとすれば、そうではない「オルターナティブ」のあり方を模索するうえで、いったん忘れられるというの

は必要な作業かもしれません。大江健三郎はこの作業を「学びほぐす」と表現しています(二〇〇七年一月二三日付『朝日新聞』)。「正しい」と学んできたものをいったん忘れる「unlearn」するところを出発点として、逆に「知識や考え方を自分のものにする」という意味だそうです。

私は「ほぐす」という言葉の意味を文字通りとって、様々な学びを専門性の枠に縛ることなく一般常識と結び付けようとする努力として強調しようと思います。「みな知っているのにできないこと」を実行可能にする方法を考えること、と言い換えてもかまいません。これは専門分野を掘り下げるといふ方向とは少し異なります。戦争をしないこと、資源の浪費を慎むこと、極端な貧しさを軽減するよう努めることといった、ごく常識的な規範を大事な場面できちんと働かせるということです。歴史は、一見簡単なこのことの実践が困難であることを私たちに教えてくれますし、学問はこの点においてあまり役に立ってきただけとは思えません。必要なのは正しいタイムミン

グにおける「常識のリマインド」です。

「資源は一つに繋がっている」という主張は、自然のそばで暮らす人にとっては常識でしょうが、資源をバラバラに扱うことが常態になっている学問や行政の世界では、そう叫ぶことにも一定の意味があります。このように学問に問題を合わせるのではなく、問題に学問を合わせていこうとする人材を励まし、増やさなくてはなりません。

ところで、いったん忘れられるという方法は、かつてデカルトが文字学問から離れて「世界という書物」に学び直すために旅に出たときに考えた方法でもありました。彼は『方法序説』の中で、旅をしながら「たくさんの部品を寄せ集めて作り、多くの親方の手を通じてきた作品は、多くの場合、一人だけで苦労して仕上げた作品ほどの完成度が見られない」という一つの確信に到達します。これは、サステイナビリティ研究にかかわる多くの学問が求心力をどこに求めて協働できるのかを考えさせる、大きな宿題だと私は受け止めています。